

書きつづることと子どもの共同性構築  
—ヴィゴツキーと生活綴方教育を手がかりにして—  
Creating Children's Relationship by Teaching Writing  
—Based on L.S.Vygotsky's Theory and Seikatu-tsuzurikatkyoiku—

発達教育科学専攻 教育学領域 河内 照治

## 1. 研究目的

学校なんて 大きらい みんなで命を削るから  
先生はもったきらい 弱った心を踏みつけるから

上記は、1984年12月3日、信州・安曇野で、15歳の少女が自死した時に残したメモである。

最近になっても子どもの自死は増加傾向にある。不登校児童生徒数も同じである。この現象に地域的な特徴を見いだすことができない。ということは、子ども達が育つ日本の教育環境に原因があると推測せざるを得ない。そして、不登校児童生徒の引き続く増加は、子ども達にとって学校は「楽しくない場」になっていることに他ならない。

上記の事から推測できることは、子ども同士の繋がりが極めて弱くなっているということである。このことから、今求められている教育実践は、生きる希望を奪われている子ども達に対して、生きる希望をもたせるための教育実践である。それは、「子どもを孤立から共同」へと導く実践であり、「子どもの思いを十分表現させる（書き綴ること）」ことであり、その思いを受け止める教師・子ども集団の必要性である考える。

これまでも、書くことと共同性の構築に関する実践書や研究論文は数多く残されている。しかし、「共同」と「書く」ことの大事さ、その両者の関係を教育心理学・実践面から同時に明らかにした研究はないといえる。本研究は、今日の子供達に求められている書くこと・共同性構築の教育実践における意義を理論面及び実践面との両面から明らかにしようとするものである。

## 2. 研究概要

### 第1章 新自由主義と子どもを取り巻く教育環境

本章では、「子どもを取り巻く教育環境」を明らかにした。子どもを含め人間は、外界の対象を自分の中に取り入れ、自分を形成していく。また、教員にとって、子どもを知るとは、ただ単に子どもを理解するというだけでなく、環境によ

て傷つき悩みあるいは喜び悲しむ生態としての子どもに触れることから生まれてくる。このように、両者にとって環境は重要な事柄である。特に教師にとって、教育環境をどのようにとらえ、どのように分析するかが教育実践上重要となってくる。

### 第1節 新自由主義について

子ども達が生きている「新自由主義社会」について明らかにした。

新自由主義社会は、政治的・経済的理論の一つである。しかし、この理論は、単なる政治・経済だけの理論ではなく、社会領域を経済的なものに変え、(福祉) 国家のサービスや安全システムの縮小を、益々増大する個人の責任や「自己責任」に関連づけることを求める政治的で合理的な行動でもある。この文脈では、新自由主義的な主体は、社会的、政治的、経済的な社会の中で、人間は一人で選択する主体であり、誰かと共に考えたり変えたり組織したりする主体ではなくなっていく。それは、言うまでもなく「人間の孤立化」である。

### 第2節 新自由主義がもたらす子どもの阻害状況

新自由主義社会が生み出す主要なものの一つは「貧困」である。貧困は、学力面に影響をもたらすだけではなく、その家族の生活様式や生活文化を知らず知らずのうちに身に付け、貧困を世代的に引き継いでしまうことになる。そしてまた、学びの土台となる人間的関わりの場としての家庭や地域の生活基盤がきり崩され、ある種の関係的真空状態(=孤立)に置かれる状況を生み出していく。

### 第3節 新自由主義教育改革が子どもにもたらす阻害状況

新自由主義教育改革の目玉は「学力テスト体制(全国学力学習状況調査)」である。この問題点は、国家が決定した教育内容に関わるスタンダードの達成率に基づく学校間・自治体間の競争による組織を内容とし、エリートと非エリートの早期選別を目的とした徹底力な国家統制という内容を持っている。そして、数値で子どもの学力や学校の実態の全てを測ることができないにもかかわらず、敢えて評価をし、また、公表することで、競争により自治体・学校を

統制していく。

「学力テスト」で、不登校や自死していく子どもの数が少なくなっていくわけではない。逆に、学力テストの点数を上げるために、教育現場で繰り返されるドリル学習は、実験や討議をし、仲間と共に真理を発見していく中から生まれてくる子ども同士の繋がり、子どもの発達に必要な共同性の構築、共同して生み出すことの素晴らしさを体験する機会を奪っていった。そのため、「イラツキ・ムカツキ」、反社会的な行動に走りがち子どもは、今や、特別な存在ではなく、ごく普通の子どものにも見られるようになってきている。

今日、学校に求められている課題は、子ども達に、社会的存在としての自分を、真の幸福実現へのベクトルを持たせる教育実践である。

それは、新自由主義教育改革によって孤立化させられている子ども達に共同性を構築していくことであり、子ども達に主体的な教育活動を体験させ、その過程から生まれてくる様々な感情を書き綴らせていくことである。書き綴るという活動は、自分の生活を再構成していくという要素が組み込まれているからである。

## 第2章 「書き綴る」ことと「共同性構築」の理論と実践

本章では、書き綴ることと共同性の構築について、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」論と千代田高等学校の実践を取り上げ検討した。

### 第1節 ヴィゴツキーに見る「書く」ことと「共同」が持つ意味

本節では、ヴィゴツキーの発達論での共同、言語（書き言葉）の位置づけを明らかにした。ヴィゴツキーの発達論の基本には、子どもの発達を二つの水準によって捉える、「二重水準理論」と呼ばれるものがある。一つは「現下の発達水準」と呼ばれるもので、既に成熟した精神機能を表わし、具体的には独力での自主的な課題解決の水準である。もう一つは「明日の発達水準」と呼ばれるものであり、現在、成熟し始めたばかりの、発達し始めたばかりの過程を意味し、具体的には大人の助けや仲間との共同によって可能となる解決の水準である。ヴィゴツキーは、こうした二つの水準の食い違いを子どもの中に見出し、子どもに成熟しつつある知的発達の可能性の領域を「発達の最近接領域」と規定したのである。

そして、ヴィゴツキーは、教授は子どもにおいて既に成熟した機能に基づいて行なわれるのではなく、まさに成熟せんとしつつある機能、つまり、〈発達の最近接領域〉にある機能を呼び起こし、発達さ

せるものでなければならないことを提起している。

では、成熟しつつある機能の領域で、どのようにして外界の対象を自分のものとしていくのであろうか。ヴィゴツキーは、「学習心理学全体にとっての中心的なモメントは、模倣を通じて移行できる可能性である」とする。発達の最接領域の形成・模倣を根底にした精神間機能の内容、それを精神内機能にしていく内化は、共同によるコミュニケーション、すなわち共同が大事な役割を担っていることを明らかにした。

続いて、ヴィゴツキーの発達論における書き言葉の位置づけについて明らかにした。

人間は、周囲の人々との言語的コミュニケーションの過程で社会の文化遺産を習得していく。その結果、人間の心理過程の支援的メカニズムは根本的に改造され、本質的に社会的な人間の意識が形成されていく。このことから、子どもの発達における言語の果たす意義が分かる。

しかし、言語の一つである「話し言葉」と「書き言葉」は全く違った発達の仕方をしていく。話し言葉を使用する言語的コミュニケーションの欲求は、幼年時代を通じて常に発達し、それが話し言葉の発達の重要な要因となっている。話し言葉は、生活の具体的な状況と不可分に結びついており、日常生活から自然に生まれ出る活動といえる。

一方書き言葉は、文字の読み書きを学び始めた子どもたちには、書き言葉の基礎となるこれらの基本的な精神機能が未発達であり、発達が始まったばかりなのである。子どもは学校で書き言葉を学習する中で、自分の言語能力を随意的に操作することを学ぶ。子どもの言語活動は、こうして無意識的・自動的局面から、自覚的・随意的・意図的な局面へと移行していくのである。

以上のことから、人間の発達における「共同」と「言語」の意義と共に、言語の一つである「書き言葉」の発達の特異性を明らかにすることができた。

### 第2節 実践に見る「書き綴る」ことと「共同性構築」

本節では、千代田高等学校（以下千代田）の実践を用いて、子どもの変様における書くことと共同性構築の意義を実践面からも明らかにした。

千代田に入学してくる子ども達は、新自由主義教育改革の下、競争させられ、学力テストによって幾度ものふるいにかけてられ、孤立させられ、自尊感情を失って入学してくる子ども達が少なくない。そのため、千代田は学力回復を学校の重点課題として取り組んでいくことになる。

その手立てとして用いたのが、子ども達の自主的・自治的な生徒会活動であり、その体験から生まれ

てくる様々な感情を書き綴らせていく場の設定である。これらの活動を通じて、子ども達は、卒業時には「『自分なんかいる意味がない』と思っていた私が、存在を認められ、希望を見つけることができた」という群読をして去っていくまでに変様させていく。この子ども達の変様が、書き綴ること・共同性の構築にあることを長谷川貴子（以下貴子）という子どもの変様を中心に明らかにしていった。

千代田では、子ども達が共同すること、書き綴り、仲間とその気持ちを分かってもらいたいと感じる場面を数多く設定している。

2年生だった貴子は、文化祭でいじめ問題に取り組むことになる。その中で、未だかつて利用したことのない図書館に行き、いじめの資料を探し始める。そこで大河内清輝君の自死と遺書を知っていく。そして、大河内君の父親と連絡をとり、自死した父親の心に触れていく。また、この活動から生まれてきた気持ちを書き綴っていく。これらの活動を通して、自分が中学校時代にしていたいじめに目を向けていく。貴子の行動はこれだけに留まらず、文化祭の中で自分がしていたいじめを告白していく。そして、自らピアスを外し、当時流行っていたポケベルを解約していく。

この貴子の行動は、書き綴ることによって自分を見つめ、いじめ調べで獲得した知を、自分の生きるストーリーの中で理解し、自分の生き方を決定し、自分を再構成していった姿だと言える。そしてまた、文化祭で発表するという行為は、千代田の子ども達への信頼があったからに他ならない。まさに書き綴るという行為は、自分を再構成し、同時に仲間の共同性構築を内包していると言える。以上のように千代田の実践は、知識を子ども達の生きるストーリーの中で獲得させることで学力回復を図り、書き綴ることで、同時に共同性構築をし、子ども達を変様させていく実践である事を明らかにすることができた。

### 第3章 「書き綴る」ことの今日的意義と「生活綴方教育」

村山士郎は、「千代田高校の実践では、一言も生活綴方とはいっていないが、その総体としての子ども観・学力観・教育観には生活綴方教育の思想が息づいている」と評価している。本章では、千代田の子ども達を劇的に変様させていった生活綴方教育について明らかにしていくと同時に、書き綴ることの今日的意義を明らかにした。

#### 第1節 生活綴方教育について

生活綴方とは、生活に結びつき、価値の選択と創造を含んだ領域において、自分の感覚や価値意識を

土台として、どう生きるかを主体的に思考する力を子どもたちに獲得させる教育の方法である。

生活綴方教育では「ありのまま書く」ということを大事にしてきた。しかし、ありのまま書くということは、どのように事実が詳しく綴られていても良しとはしない。ある事実と子どもの内的な感情や意識とのぶつかり合いがなければ、生活の事実をリアルに捉えたものとはしない。それは、自己の目的意識性を通して、生活を再構成することへと向かわせることに生活を書き綴ることの教育的意味を見い出しているからである。

また、生活綴方教育では、書き綴ることは仲間に対する信頼・共同を前提としており、書き綴ることによって仲間との絆をより強固なものにし、そのことにより、さらに強く書き綴る行為を生み出し、発達段階に応じて生きる方針を生み出し、自分を再構成していくというサイクルをもっているのである。以上の生活を書き綴ることに組み込まれている再構成、共同性の構築が子ども達を変容させていくのである。

#### 第2節 今日子ども達と「書き綴る」ことの意義

今日子ども達は、本当の自分を表現することが難しい状況が生まれている。その一つはメールやスマホである。絵文字を交えてメールをするなど、表現の短縮化・画一化の行動様式が広まっている。一方では、厳しい学力競争の中で、学ぶことの意味が、自分から切断されている。それは偏差値を獲得するために学ぶ課題があつて、どれだけ学んでも自分の生き方にとってどのような意味があるのかという問題は、その思考の文脈の中に入らないものとなっている。そうすると、自分の感覚や価値感覚を土台にして思考するということができなくなる。自分の中に価値があるという自覚も失われていく。

このような環境や自分のストーリーとは関係のない学びは、イラツキ・ムカツキ、反社会的な行動に走りがち子どもを再生産していく。

上記の子ども達の実態を見るとき、まさに、生活綴方教育の実践は、1950年代に必要とされた教育実践だけではなく、今日子どもにとってこそ、求められている大事な教育実践の1つであるということが明らかになった。

### 第4章 「学校づくり」における「書き綴る」と「共同性構築」

本章では、これまでの各章で明らかにされてきた事柄を踏まえ、「学校づくりにおける書き綴ることと共同性構築」について明らかにした。私が、長い間、小学校の教育現場で勤務していたこともあり、私の実践を交え、本章の課題を明らかにしていった。

## 第1節 書き綴ることを通しての子ども理解

私は、生活綴方教育に近い方法で子ども達を理解し支えてきた。それは、個人日記・班ノートである。時には授業感想ノートもその役割を担ってきた。このような書くことを大事にした実践で、友だちと支え合い・協力する関係が生まれていった。子ども保護者とも良好な関係であった。子ども達は、如何にして仲間同士の絆を深めていくか、如何にして互いを伸ばしていくかが、個人日記や班ノートに綴られていた。そのような活動を、私は、学級通信「かけはし」に載せていった。

しかし、本研究を進めていく中で、私の学級の子ども達は、どうして家庭での生活の様子を題材にした個人日記を書いてこなかったのだろうかとの疑問をもった。それは、担任である私の弱点であることを発見した。子どもを支えることの中から、子ども達の家庭生活に対する支援が抜け落ちていたのである。そのため、子どもの表現の中に家庭での問題が書き綴られてこなかったのである。

今考えてみると、私立中学への進学について、何人もの子ども達が悩んでいたはずである。受験勉強に悩む子ども達が書き綴ってきた内容を読み合うことによって、社会の有り様に気づいてくる子どもが生まれてきたかもしれない。その子ども達の心に寄り添う班が生まれてきたかもしれない。班活動は社会から切り離されてはいない。全ての感情が吐露された時、教師が子どもを知り・支え、子ども達の間にも真に共同性が構築されたと言えることを検証することができた。

## 第2節 「学級集団づくり」と「全校集団づくり」

学級集団づくりと全校集団づくりとは密接な関係であることを明らかにした。特に高学年の全校集会等での行動は、「学校の文化」を創り上げることに関係している。また、全校集会等では、発表する・聞くという一方向の関係ではなく、双方向の表現が大事であることを明らかにした。更に、今日の子ども達の実態は、「少年期の消滅」という現象に見られるように、仲間づくり、自己表現等について非常に弱い面を持っている。これらを個人日記等から把握し、その事を念頭において支援していくことの大事さをも明らかにした。

## 第3節 ストーリーを大事にした授業づくり

学級集団づくりはわかる授業と表裏一体である。わかる授業の保障がないと学級づくりも保護者の協力も得ることができない。

授業がわかるということは、学ぶ対象についてわかるという「対象認識」と、学ぶ対象と自分との関係・意味付けである「関係認識」という2つの認識が成立する必要がある。対象認識だけでは、いくら

認識を深めても、それをどれだけ学んでも自分の生き方にどのような意味があるのかという問題は、その思考の文脈の中に入ってはこない。すなわち暗記をしているだけである。対象と自分との「関係認識」を位置づけることによって、知識は生きて働くものへと変化していくことを明らかにした。

## 第4節 教職員集団の力で学校を創る

学校を創るための大原則は、学校を構成する者が創意工夫をこらし、合意を形成しながら教育活動を実践していくことである。この実践で大事なことは幾つもある。一つは、支え合い・共同し合う集団である事、次に、学校教育目標を達成していく過程で、教職員の主体性が発揮できる環境の構築等である。そしてまた、子どもに主体的な表現を求めるには、職場が教職員に主体的な表現を求める職場でなくてはならない。民主的な職場は、必ず子ども達に民主的な集団を求めていく。有能な管理職や有能な教壇教員の個の力より、結束した多くの教職員集団が生み出す力の方が大きいことは容易に推察できる。

## 第5節 学校と保護者・地域との連携

教育権を国民の基本的人権の一つとしてとらえると、学校と保護者・地域との連携は、保護者・地域住民の大事な権利と考えるというこである。従って、保護者や地域住民と共に子育てをすることが学校経営の基本的なスタンスとなる。学校、保護者・地域住民が様々な表現を通して、日々新たな共同性を構築していくことの意義を明らかにすることができた。

## 3. 今後の課題

「書き綴ること」「共同性構築」は、今日の子ども達にとって必要とされる教育実践であると共に、高次精神機能の発達にとっても重要な意義をもっていることを明らかにすることができた。

だが、今日、新自由主義によって、地域は、人間が支え合い育ち合う場ではなくなりつつある。また、公民館を初め地域の公的機関は民営化されている。これからの学校は、子ども達の発達を保障していくと共に、地域の文化を支え、子どもの発達に必要な共同性を構築していくためのセンターとしての機能を兼ね備えた学校の存在が必要となる。従ってそのような学校の在り方を研究し、明らかにしていくことが課題となる。

## 主な参考文献

- ・堀尾輝久、『教育入門』岩波新書、2013年。
- ・子安潤『リスク社会の授業づくり』白澤社、2013年。
- ・教育科学研究会編、『別館 戦後日本の教育と教育学』かもがわ出版、2014年。

- ・中村和夫、『ヴィゴツキーの発達論』東京大学出版会、1981年。
- ・中村和夫、『ヴィゴツキー心理学』新読書社、2008年
- ・村山士郎、『現代の子どもと生活綴方実践』新読書社、2007年。
- ・佐貫浩、世取山洋介編、『新自由主義教育改革 その理論・実態と対抗軸』大月書店、2008年。
- ・佐貫浩『「石田和男教育著作集」を読む』、2017年。
- ・柴田義松『ヴィゴツキー入門』寺小屋出版、2015年
- ・鈴木大裕、『崩壊するアメリカの公教育』岩波書店、2016年。
- ・千代田高等学校著、『青春がはじける学園』清風堂書店、2000年。
- ・ヴィゴツキー、柴田義松訳『思考と言語（下）』明治図書、1986年。
- ・ヴィゴツキー、土井捷三・神谷栄司訳、『「発達の最近接領域」の理論』三学出版、2014年。
- ・山本由美、『学力テスト体制とは何か』花伝社、2009年。